



「きっとこっちだよ！！」

コト

目的地へと走るコート。

しかしいくら探せども、そこでプレゼントを見つけることは出来なかった。



「ぐぬぬ……」

コト



「降参だね……アンバーおねえさんに教えてもらおう」

フド

フドに連れられ、本部へと向かうコート。



「あばばばば」

アンバー

探し回っている間に祭りも終盤。

アンバーの泥酔も最高潮に達していた。

ブルーシートの中心で横たわる彼女は、まるで死んでいるようで。

……とっても愚かだった。



「こんな人に頭を下げたくないなあ……ん？」

コト

ふと。違和感。

アンバーが倒れているブルーシートになにか……。

隠しと言っていた、プレゼントと思わしきものが置いてあるではないか！

隠しと言っていた段階で酔っていたアンバー。プレゼント。情報がつながっていく。



「……この人、やってないかなあ」

フド



「……もらっちゃおうか」

コト

突然のことに冷や水を浴びせられた二人は、アンバーを放置してお祭り会場を後にした。



「ぜったい途中でお酒もらってああなったよね」

フド



「ほんとうにあのひとはバカ酒飲み」

コト

ふたりはすっかり暗<sup>くら</sup>くなった道<sup>みち</sup>を歩<sup>ある</sup>く。

街灯<sup>がいとう</sup>に照<sup>て</sup>らされて見え隠<sup>みかく</sup>れするフードの表<sup>ひょうじょう</sup>情<sup>み</sup>を見つめながら、フードも歩<sup>ほ</sup>を進<sup>すす</sup>める。



「今回のプレゼントはなんだったんだろう」



「せっかくだし帰<sup>かえ</sup>るまえに開<sup>あ</sup>けちゃう？」

街灯<sup>がいとう</sup>の前<sup>まえ</sup>で立ち止<sup>と</sup>まる。

ぺりぺりと包装<sup>ほうそう</sup>を開<sup>あ</sup>けるとそこには絵本<sup>えほん</sup>が入<sup>はい</sup>っていた。



「なぜ？」



「タイトルは『ぼろ布<sup>ざれ</sup>のハンス』だって」



「作者欄<sup>さくしやらん</sup>は……書<sup>か</sup>いてないね、まさかアンバーおねえさんの手<sup>て</sup>作り<sup>づく</sup>だったり？」

ぺらり。

### 『ぼろ布<sup>ざれ</sup>のハンス』

あるところにとってもポロポロなお姫様<sup>ひめさま</sup>がいました。

なんたって従者<sup>じゅうしゃ</sup>に裏切<sup>うらさ</sup>られて川<sup>かわ</sup>に突き落<sup>つ</sup>とされてしまったのですから。

オシャレなドレスはびしょぬれ、高い靴<sup>たか</sup>はヒールが折<sup>くつ</sup>れて泥<sup>お</sup>まみれ。

綺麗な顔<sup>きれ</sup>だって濡<sup>ぬ</sup>れていましたが、そこに涙<sup>なみだ</sup>はありません。

お姫様<sup>ひめさま</sup>は川<sup>かわ</sup>から出<sup>で</sup>ると濡<sup>ぬ</sup>れた服<sup>ふく</sup>を絞<sup>しぼ</sup>って自分の影<sup>じぶん</sup>に被<sup>か</sup>せ、こ言<sup>い</sup>いました。

「あなたも寒<sup>さむ</sup>かったでしょう？ さあ、温<sup>あたた</sup>まりなさいな」

彼女<sup>かのじょ</sup>には友<sup>とも</sup>がおりました。

その友<sup>とも</sup>は喋<sup>しゃべ</sup>れず— 姿<sup>すがた</sup>も誰<sup>だれ</sup>にも見えませんが—。

いつでも、いつだって、自分<sup>じぶん</sup>の側<sup>がわ</sup>にいてくれました。

彼女<sup>かのじょ</sup>は友<sup>とも</sup>達<sup>たち</sup>がいればどんな困<sup>こん</sup>難<sup>なん</sup>にだって立ち向<sup>たむ</sup>かうことができました。

神様<sup>かみさま</sup>が見<sup>み</sup>てなくなつて、光<sup>ひかり</sup>に照<sup>て</sup>らされなくなつて。

いつでも、側<sup>がわ</sup>にいてくれました。



「……どういう意味<sup>いみ</sup>なんだろう」





「複雑な文章なんて大抵中身が薄いことのカムフラージュだよ！」



「そんなこともないと思うけどなあ……」

今からアンバーおねえさんに意味を聞きに戻る気にもなれず、  
再び歩き出した二人はすぐに立ち止まった。  
沢山の街灯が坂を照らしている。  
この坂を登ればコートの家、下ればフードの家だ。



「あ、もう着いちゃったか」



「うん！明日は始業式だから寝坊しないようにね！」

コートの言葉にぴくりと反応するフード。



「あ、まだ上履き洗ってないや」



「乾かす時間が絶望的じゃん」



「急いでブラシしないと……」

慌てて取り乱すフードをほほえましく思いながら、コートは坂に足をかけた。



「また明日！」



「来年も3人でお祭りに行こうね！」

フードの後ろ姿が小さくなっていく。  
電灯の灯りに照らされながら、私は暗闇に消えていくフードを見送った。

今日のお祭り、楽しかったな。  
家に帰った私は微笑みながら、寝る支度をするのであった。

夜が更けていく……。